

図書紹介

平松貞実著「世論調査で社会が読めるか —事例による社会調査入門—」

(1998年4月新曜社)

興津正熙(個人会員)

本書のキーワードは“面白さ”である。

とにかく、すらすら読めてかつ面白いのである。

「この本は“社会調査に興味を持つてもらうこと”を目的とし」「サラリーマンや家庭の主婦が教養書として読んでおもしろい内容となっている」と著者は述べているが、その意図はほぼ達成されているのではないか。

なぜ、本書は面白いのか。その辺から本書を紹介することとしたい。

<題名にまず惹きつけられた>

本書のタイトル、表題を見た瞬間、筆者は反射的に、“読みたい”という気持を抱いた。理屈はない。とにかく、読んでみたいと思った。

“世論調査”も、“社会”も日常よく目にし、耳にする言葉であり、“読める”という動詞も極くありふれたものだ。従って、もし題名が「世

論調査で社会が読める」であれば、類書の中の1冊か、ぐらいの思いで、手に取ることもしなかったかもしれない。それが最後にたった1字“か”が加わっていることで一変した。にわかに、今風にいえば“差別的、個性的”タイトルの様相を帯びたのである。

そもそも「……か」という表題はそう多くはない。手許の図書目録を見れば直ぐ分かることだが、いわゆる時局ものハウツーものには、ないわけではない。例えば「政治はどこへ向うのか」(佐々木毅 中公新書)とか「なぜ新規事業は成功しないのか」(大江健 日本経済新聞)などである。

素朴な疑問、率直な疑問を題名にしたものもある。古くは「大ピラミッド、それはなぜ建てられたか。また誰が建てたのか」(ジョン・ティラー、1859年)。「禅とは何か」(鈴木大拙)。こちらは古典の世界になるが、例は少ない。

文学書では「いかに木を殺すか」(大江健三郎)がある。題名だけ見ればハウツーそのものだが、内容はもちろん大違い。シェークスピアの「マクベス」で「木」は小道具として重要な役割を与えられた。大江作品では勿論小道具扱いではない。谷間の小さな村で権力に抵抗する女性たちの生きざまを、「木」を媒介として物語っているのであるから主役といって良いのかもしれない。しかし、読者にとっては主役はあくまで女性であり、「木」の存在は意識的に読めば読むほど、像はぼやけてはっきりしない。それでも読み続けるのは表題の「殺すか」という反語的なトーンによるところが大きいのではないか、と筆者は思っている。「木」はいったいどうなるのか、という、素朴な疑問が、女たちの行動——それも曇りガラスを通してみる、影絵のような危うさと不確さを伴って描かれる、伝説なのか、現実なのか定かでない、虚である実在、あるいは実在する虚ともいえる物語り、を読む支えとなっているのではなかろうか。

本書のタイトル「世論調査で社会が読めるか」は、もちろんハウツーものではないし、単純な疑問に答えるものでもない。大江作品のようなメタファ的表現でもない。

筆者は直感的には「世論調査」への苦言ではないかと受け取った。読んでみて、この直感は当たらずとも遠からずと思っているが、より良き「世論調査」への提言の意味を込めたタイトルと見るべきであろう。

ともあれ、表題の最後の「か」は、たった1文字であるが、時に大きな意味があり、当然そこに惹かれる人もいるわけである。

<世論調査の結果をそのまま信ずるなかれ——序章>

本書は、序章 世論調査は信用できるか、I. 回答形式で結果は変わる(1章から7章)、II. 世論調査の聞き方いろいろ(8章から12章)、III. 社会調査で社会を見る(13章から16章)、終章 世論調査を正しく見る方法と、独立2章と、3部——16章、の18章から成る。

本書の特徴の1つは、実にはっきりと著者の意見が述べられ、それゆえに面白いというところにある。全編至るところいろんな形で著書の意図、期待、希望、懸念が率直に語られており、読者は「世論調査」に対する著者の真摯な姿勢と、本書に託す著者の熱意に圧倒されよう。その辺は序章の前に置かれた“はじめに”に端的かつ簡潔に述べられているの

で略出してみる。

「この本は『社会調査』なかでもわれわれが日常よく目にする『世論調査』を勉強することに興味を持つてもらいたい、と思い立って書いたものである。サラリーマンや家庭の主婦が教養書として読んでおもしろい内容となっているが、社会科学系の大学生には是非読んでもらいたいと思っている。」

「困ったことは、大学の『社会調査』の講義はおもしろくないものが多い。社会調査の“見方”ではなく“仕方”を講義するからであろう。だが、社会調査そのものがおもしろくないわけではない。そこで『おもしろい』話を先にしていったらどうかということ、この本を書いてみた。」

「この本によって『世論調査・社会調査』のデータから社会を正しく見るむずかしさ、おもしろさ、を知つてもらえば幸いである。」

さて序章である。「世論調査は信用できるか」と、この章のタイトルも「か」を伴っている。序章に対する著者の思い入れが有無をいわざず伝わってくる。

冒頭、著者は問いかける。

「世の中にはマスコミを通じて情報が満ちあふれているがそれらの情報をそのまま信じていいのだろうか」とくに数字による情報は「“厳然

たる事実”として受け止められる傾向が強い。『世論調査・社会調査』も数字だからといって信じていいものかどうか、をこの章で考えてみたい。」

そして、世間の人が漠然と抱いている“世論調査”への信頼感は見直さなければならないのではないか、と迫ってくる。「誤差」を縦の柱とし、豊富な実例を横の軸として、著者は“世論調査”をまるごと信ずる愚を、危険性を、説いて止まない。その姿勢は、少し大袈裟にいえば、旧約聖書の予言者に似たものを感ずる。冷めた読者もその熱気に引き込まれるであろうし、“家庭の主婦”ならば、ショック効果で読み進むのではないか。

著者は、本書が「あまり内容が軽いものでもと思い、序章と終章をつけたが、暇つぶしに読むならば、序章を飛ばして1章から気軽に読んでもらってもよい。」と述べているが、なかなかどうして。“暇つぶし”ならなおのこと、序章はじっくり読むことを奨めたい。

本書の目途すところは、すばり入門書ないしは啓蒙書である。であるなら、通常イントロには概論的な記述があるわけだが本書は違う。いきなり“世論調査は信用できるか”という核心部分に入る。それだけイン

パクトが強い。“事件”から始まる推理小説の趣がある。面白いのだ。

調査には誤差がついて回る。調査すべき対象が既に誤差を内包している。母集団自体があいまいな調査も少くない。同一世帯であっても夫が答えるか妻が答えるかで結果が違う。調査主体がどこであるかでも違いが出てくるし、調査員による影響もある。アンケートの順番だけでも違いが生ずる。言葉づかいによる応答の差はあって当たり前だ。

さらに、回答者に起因する誤差がある。第一に回答者のウソによるものがある。1951年の統計数理研究所の研究で、投票に行った、行かなかったについて約15%の人がウソ（棄権したのに行った、行ったのに棄権した）をついている結果が出ている。これは、日本だけでなくアメリカでも同様の結果が出ていることも西平重喜「統計調査法」から紹介している。人間であることによる止むを得ないものと著者は見る。

第二に「訴願心による誤差」があるのではないか、と著者はいう。聞き馴れない言葉であるが、「調査結果が自分達に有利な結果をもたらすことを期待して回答することによる歪み」で、ネーミングは著者自身の創作である。労働組合の賃上げアンケート、環境施設導入の可否などを

考えれば、合点できるだろう。敢て蛇足を加えると、ここでいう“訴願”は、法律用語の訴願とは意味が違ひ、むしろ字義そのものと理解すべきと考える。

いずれにしても「世論調査・社会調査にはこんなに誤差があるのになぜ問題にならないのか」「その理由は3つある。」

第1は『当たらずと言えども遠からず』かつ「役立つという実感がある。」

第2は「『調査は信用できない』というレッテルを貼ってしまうと」いろんな面で不都合が生ずる。

第3は「誤差のなかで『サンプリング誤差』が重視された」反動で、「サンプリング誤差さえクリアしていれば調査は信用できる」という印象を与えてきていることである。

第1点はともかく、第2点、第3点には異論のある人も少くないかもしれない。しかし著者の真意はどうも違うような気がする。「調査の結果は事実を知る素材でしかないのだから調査結果は吟味し、解釈し、加工して使用すべきだ」と考える著者である。野菜を仕入れようとする調理人は、素材（大根、ネギなど）そのものがよければ、泥の有無はさほど気にしないようだ。著者も事実という素材が認められれば、泥（誤差）

の有無は問題にしないのではないか。それを端的に示す文章は見当たらぬが、底を一貫して流れているのは、素材の鮮度（確かさ、信頼性）の見極めが如何にむずかしいことであるか、泥（誤差）を落し素材を生かす（分析、解釈）ことが如何に重要であるかを、切々とした訴えである。泥は必ずついている。問題は落し方、と著者は考えていると筆者は思っている。

＜巧妙な『実例』さばきが面白みを倍加 — 各論＞

著者の文章は軽妙かつ暢達である。ややともすれば晦渺になりかねない世論調査、社会調査の所論を物語のように平明な言葉で綴っている。極めて読みやすい。

さらに著者は読みやすくするための工夫を重ねている。

多数の実例のコマ割り配置、というべきものがその1つだ。実例は文章の中にも頻繁に現われるが、それとは別に、序章から終章まで各章の説明資料として延67項目の引用が為されている。その引用の仕方であるが、調査全項目を記録したものは見当たらぬ、極く一部の項目を摘記したものが殆んどである。その代わりといってはなんだが、同一調査と

思われる項目が章を超えてあちらにもこちらにも現れる。

2つには、資料のページを文章と別に設けたことだ。本文が縦組であるのに対し、資料は横組とし、すべて1ページに収めた。ビッシリ活字や表で埋まったページもあるが、余白のたっぷりしたページもある。資料の納まる場所は、当然のことながら最も関連の深い文章の間あるいは極く近いページである。

3つには、著者が講師を務めている東洋大学の学生を対象とした調査例を巧みに利用したことである。引用実例項目が多いのは前述の通りであるが子細に見ると調査機関はそう多くはない。出現頻度の高い東洋大学が8時点での調査で14資料、ついでベル・マーケティング・サービスの3時点での調査12資料とこの両機関で資料の4割を占めている。著者は資料さばきとでもいおうか、好投手がコーナーワークを目いっぱいに生かすように、各章、各節、ときには用語に至るまで資料を然るべく利用しているが、なかんずく東洋大学の実習調査を活用している。学生を二群、ときには三群に分け、普通では実施がむずかしい、質問項目の多寡、質問順序の前後、質問文の違いによる結果の差異を社会調査的に捉えた実例である。たとえ誤差が

あるにせよ圧倒的な存在感がある。同様なことはベル・マーケティングの調査についてもいえる。

かくして、各論であるⅠ、Ⅱ、Ⅲ部の各章は分かりやすく、説得力に満ちた面白い読みものになっている。またここでも、タイトルにはかなりの工夫の跡がうかがえる。

そのあたりを味わってもらうため章の見出しと、各章の末尾に述べられている“著者からの一言”を合わせて紹介したい。

(注) カッコ内は著者からの一言

1 章 日本人は人情課長が好き
(調査結果の「ネーミング」にご用心)

2 章 観光で行きたい国はどこ?
(世論調査では「答え」がなければ「答え」は出ない)

3 章 自社ブランド1位の秘密
(回答の順序にも注意を)

4 章 世論は賛成? それとも反対?
(世論調査で賛成と出るか反対と出るかは回答形式しだいである)

5 章 内閣支持率って何?
(内閣を「支持する」と「続いてもよい」とは同じではない)

6 章 支持政党はあるの? ないの?
(好きな政党もあれば嫌いな政党もある、どちらかだけの調査では片手落ち)

7 章 自由に答えさせる不自由
(自由回答法の世論調査では、聞いても答えは返ってこないと思え)

8 章 自分と他人とどちらがホンネ
(調査ではホンネの現われ方は複雑である)

9 章 ていねいな質問に気をつけろ
(質問文のない調査はないが、結果に影響を与えない質問文もない)

10 章 単純な質問、複雑な質問
(総論で聞けば誰だって賛成。賛否を問うなら各論で聞け)

11 章 何から聞くかで結果が変わる
(まずテーマありき、テーマを離れた質問も回答もない)

12 章 機械を使った調査
(人の意見にバーコードはついていない)

13 章 “態度”はどのように測定するか
(世論とは賛成の数ではなく意見の分布状態である)

14 章 イメージとは何か
(世論調査で見てるのは社会の全体ではなく側面である)

15 章 “中流”調査のルーツ
(どの階層に属するかの自己判定は信用できない)

16 章 日本の社会の姿は?
(タテの社会構造は量的だけでなく質的にも変化する)

<コンパクトな社会調査概論 — 終章>

本書の“はじめに”で「この本は」「社会調査の概論書ではない」と記した著者であるが、終章は簡潔な概論になっている。社会調査は“総称”で世論調査はその中の1つであることを述べ、社会調査の種類、その分類等を概略説明、必要最低限のたとえ名称だけにしても学びとることができるように仕組みになっている。

とはいっても、単なる概論で終わらないのがこの著者の特徴であり、本書の面白さである。新聞の世論調査には、紙面発表用と選挙予想用の2種類があると著者は指摘する。紙面発表用の世論調査とは、その調査以外には国民の声が分からぬ調査であり、「結果がそのまま大手をふって通っている」ものである。対して選挙予想用の調査は、結果をそのまま使うことはない。どこの新聞社でもこれまでのデータから割り出した係数で修正し報道する。選挙予想調査は必ず“選挙”によって検証されるからだ。この操作によって、従来の選挙予想は、実際の選挙結果とはそんなに違わないという実績を各社と

も積んできた。

著者はそのような現状に対し、「最近の傾向は、以前と比べると調査結果をそのまま予測に使う方がいいという意見が強くなってきてる」と述べている。周知の通り先の参議院選で各紙の立てた予想と選挙結果は全く違ってしまった。その意味で終章は選挙予想の持つ特徴と危うさまで述べたものと評価できる。

今回の参院選の予想と結果を著者はどう見ているか、聞いてみたい。

以上述べてきたように、本書は序章から、終章までいずれも面白い。読みやすい。

反面、そこに物足りなさを感じる事実である。

もう少し突っ込んだ理論もほしいし、周知の言葉として突如使われる術語についても説明が乏しいように思われる。しかし、本書にそれを求めるのは些か欲張り過ぎというものだろう。目的は十分果しているのだから。

今後教養書、入門書から一步を進め、より専門的な世論調査研究に関する著書を期待したい。▲